



KNOWLEDGE CAPITAL
ナレッジキャピタル



GRAND FRONT OSAKA
グランフロント大阪

29.10.03・10.18

地方創生セミナー IN ナレッジサロン（第11回・第12回）

近畿財務局ではナレッジキャピタルとの共催で、10回にわたって創業支援や観光振興をテーマに講演会・交流会を実施してきました。

企業人、研究者、クリエイター等、会員数2000人を誇る“知的創造・交流の場”であるナレッジキャピタルと共催することで、当局とつながりのある自治体・金融機関と民間事業者（ナレッジキャピタル会員）の交流の場を設け、新たな相互連携を促し、地方創生支援を行うものです。

第11回は、『農業を変えていく人の輪を広げたい～自産自消ができる社会を目指して～』をテーマに、野菜好き、農業好きが増えるよう取組む「自産自消ができる社会へ」に向けた活動をしている、株式会社マイファーム 代表取締役の西辻一真氏をお招きし、開催しました。

また、第12回は、『社会的投資を活用した持続可能な地域社会づくり』をテーマに、新しい地域モデルを広めている株式会社PLUS SOCIAL 代表取締役の深尾昌峰氏をお招きし、開催しました。いずれの講演でも参加者は一様に興味深々というご様子で臨まれていました。

以下、講演内容と名刺交換会・交流会の様様をご紹介します。



H29.10.03 講演会 『農業を変えていく人の輪を広げたい ～自産自消ができる社会を目指して～』

◇はじめに

株式会社マイファームは今年で10年の会社で、一つの社会「自産自消ができる社会」を作りたいと思っている。「自産自消ができる社会」とは、私たちが作った造語であり、世の中の人みなさんが、野菜づくりが好き、農業が楽しい、農業に可能性を感じるというようなことを思っただけの社会を目指して活動している。

創業から10年経ち、私のイメージの中では、創業時に考えた「自産自消ができる社会」には、まだ全然近づけていないと感じており、達成率としては1%ぐらいかなと思っている。

マイファームでは、活動を続けながら、農業を楽しむ人や農業に取り組む人が増えていくことを期待している。



◇農業の醍醐味とは

農業の良さは5歳でも、80歳の方でもできるということで、農業界の平均年齢は67.5歳であり、もし60歳で退職されて農業の世界に飛び込むと若手になる。

仕事を退職された方が農業界に入り、年配の方から若手と呼ばれ、「一から頑張れよ」と言われることは、すごくいいことだと思っている。

当社の職員も、一番上は75歳、一番下は18歳と、幅広い年代の人たちが同じフィールドで業務に取り組むことができている。

これは農業の醍醐味の1つではないだろうか。

もう1ついうと、毎日いつも目の前の野菜と向き合うことができれば、どんな人でも農業を使わずにオーガニックで、なおかつ最高にいい野菜が作れると思っている。

しかし残念ながら私たちは人間なので、生きていく中で様々な他のことに時間を割かないといけない。その時間をどう穴埋めするかが、実は農業の本質なのではないだろうか。

これが反対に効率化を追求すると、全部自動化で野菜を作ることができ、ビジネス的には◎だが、野菜を作っている農家本人にとってはあまり面白味はないかもしれない。



この狭間で、どう自分の農業の中で生き方を決めていくのかということが、農業のおもしろさなのではないかと私は思う。

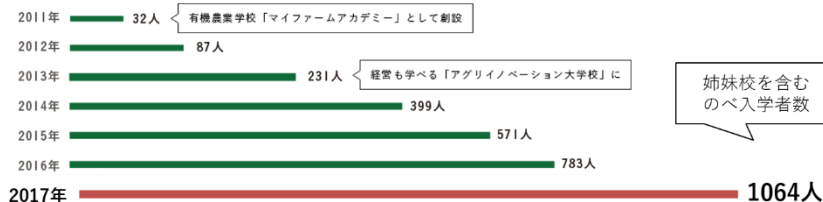
◇農家を育成するアグリノベーション大学校

当社では、何か新しい方法で、日本中に広がっている休耕地を耕せないかと思い、農業学校アグリノベーション大学校を2011年にスタートさせた。

事業を始めた時は授業料等で年間70万円ほどいただくこともあり、高額すぎると言われてきた。

農業と言えば、例えば、県立の農業大学校に通ったり、丁稚奉公で学んでいくのが基本スタイルなのに、有料である必要はどこにあるのかという疑問である。

入学者数（累計）

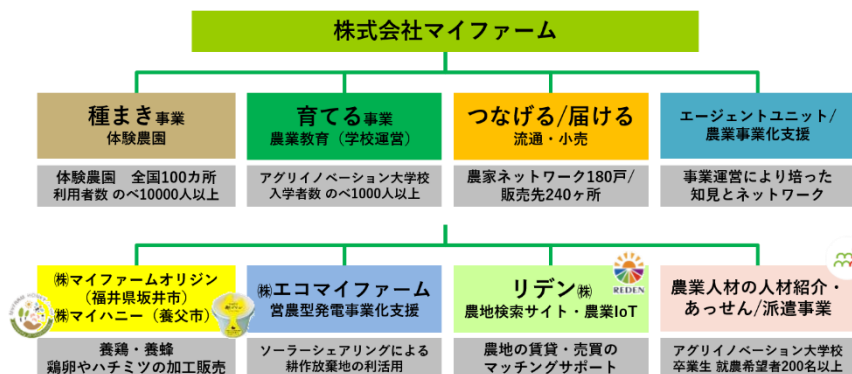


その時、いつもおかしいと思っていたのが、例えば美容専門学校や他産業は一定の資格を得て、仕事にする人たちがいるにもかかわらず、**農業はなぜ専門的に学んではいけないんだろうか**と。他産業と比較しても、先の未来、農業も専門学校化が進んでくるとの思いから、黙々と取り組んでいた。

お陰さまで入学生が1000名を超えてくると、他の専門学校や最近では農水省でも**農業塾、農業学校**をやりましょうという声がかかり、後から**農業の専門学校化の時代**がついてきていると感じる。

◇耕作放棄地をゼロにするため、様々な角度から取り組む

少し前、太陽光パネルを張るのが流行ったが、売電価格も下がってきていることもあり、最近では、農地の上に、パネルを張り、その下で農業をやる「ソーラーシェアリング」が流行ってきている。当社は、その分野で最大手であり、「ソーラーシェアリング」しながら、その下で漢方薬を作ったりしている。この漢方薬を販売する形で売電×野菜作りという活動を千葉県中心に行っている。



ニワトリの平飼い

また、兵庫県の養父市では養蜂業、福井県では養鶏業をやっており、全部入れると大体10億円規模の会社であるが、残念ながら利益率は6%ぐらいである。

他産業と肩を並べるくらいに利益率を上げていかないと、農業界にもっと多くの企業や人が入ってこないと思っているので、企業、人が入ってきてほしい私としては、収益を上げていくと心に決めている。

◇プロ+アマチュアへのサポート



一昨年から、大阪府・JA・マイファームの3者で大阪アグリアカデミアという、プロの農家に対し、売上を伸ばしていただく目的の塾を開催している。

あと5年もすれば、これから農家を始める人は、かなり専門的な知識を身に付け、農業経営者としてしっかりやってくれる方が増えるのではないかと私は予想している。

就農「後」こそ、「学び」が必要
～農業経営者のための「経営塾」大阪アグリアカデミア



- ◆大阪府（自治体）とJAグループ大阪との共同事業
- ◆リーダー養成コース20名／右手の後継者が変革する、個人経営から法人経営へ
- ◆スタートアップコース20名／給付金だのみの赤字経営から脱却を目指す！

また、農業界に安心して飛び込める環境を作るため、農業の楽しい産業化を打ち出している。

実際には、体験農園、農業学校、流通業、人材紹介、農地の賃借・売買のマッチングサポートなどをしている。マッチングサポートとは全国の農地を探すことができるサイトを運営し、私が大学生の頃、農地を探すのに苦労した経験から、農地を探すことに困らないような支援を行っている。

他にも、農機具のレンタルシェアをして、必要なときだけ農具を使ってくださいという取り組みであったり、農家が忙しいときに手伝いに行く人材紹介派遣業もやっていたり、人材の部分と農機具の部分をサポートしている。

◇プロの農家は本当のプロであってほしい

当社では、輸出にも取り組んでいるが、輸出はとても大変。
例えば、輸出取引する際に、①産地の証明書、②生産工程を明らかにする証明書、③放射能に関する証明書の3つが必要になる。産地と放射能はいいとして、生産者がどうやって作ったかの証明しろと言われたら、日本の多くの農家はできない。

皆さんもイメージできるかもしれないが、田舎の農家の方に、いつ鶏糞を撒いたか、いつ収穫をして倉庫に置いたかなど、そこまで記録を取ることは手間が難しいのが、今の日本農業の実情。

日本の農家の技術は、レベルが高いと思われるかもしれないが、そうでない一面もあり、国内レベルで見ても、野菜の質を高く維持するというのは困難な技術である。



もう一度技術を高めて、本当に消費者の方が喜ぶおいしい野菜を作る農家にならないといけないと思うし、グローバルスタンダードを超えた優位性を持つ農家が出てこないといけないと思っている。

質疑応答

講師の呼び掛けにより、たくさんの質問が飛び出しました。興味深いものをいくつか紹介します。



【質問】

野菜栽培は待つ必要があまりないため、比較的参入障壁が低い。しかし、果樹栽培はどうしても待つ必要があり、その意味で参入障壁がある。あと果樹はどうしても年1回の収穫となるが、野菜なら場合によっては複数回。

こういう中で、野菜栽培への新規参入はたくさんあると思うが、果物と野菜を比較したときの参入障壁をどうお考えか。

【回答】

本当は選択肢として果樹栽培もしたいが、確かに、収穫までの期間が長過ぎて、自動的に選択肢の中から果樹栽培をしない新規参入者は結構いる。



解決策として、大切なのは事業承継。果実の木がまだ生きているのであれば、新規就農者がお金を出して買うでもいいし、例えばミカン農家をやっていて、息子が継がないからどうしようという状況下で、定年を超えたら継ぐという場合がほとんどであるが、それだと木としての資産運用ができていない。資産運用をしっかりとて、木を売却すると言えば、おそらく手を挙げる人はいると思うし、そうして承継していけばいいと思っている。



【質問】

少子高齢化時代に入り、実家も農業をやっていたが、両親が年を取り、やめてしまった。高齢化がこれから急速に進んでいくとしたら、新規就農者よりやめていく農家が多くなり、耕作放棄地は逆に増えていくような気がする。

それに対しマイファームとして何か行動を起こすとか、お考えがあれば伺いたい。

【回答】

耕作放棄地をなくすためには既存の人がもっと使うか、新しい人が使うしかないと思う。

しかし、私は耕作放棄地は新規就農者が使うべきではないと考えていて、耕作放棄地になる場所は、農業界的に一番条件が悪いところなので、新規就農者が一番最初に始める場所としては勧めていない。時々、ハチとかニワトリの飼育を始める人もいるが、そんな方には進んで山奥の耕作放棄地に行ってもらったほうがいいと思う。

山奥と山から少し降りてきたところの耕作放棄地は今まで既存の地域で頑張っている人たちが規模拡大をしないとイケないと思う。

一方、都市部にも休耕地は増えてくると思っており、当然やめる方もいると思うが、税金が高くてなかなか対応できないという方もいる。そんな方々は都市住民が住んでいる場所なので、農業公園化をしたほうが良いと思う。農業公園化とは、例えば農業体験するような場所にしてみてもいいし、土に触れることができる場所にするなど、作っていく中で考えていけばよい。

中山間部では、新規就農者を養成する。都市部では、農業体験を増やしていく。

このような形で耕作放棄地については解決していきたい。

とはいえ、私たちの活動より高齢化のスピードの方が早いので、耕作放棄地が増えてきていることは間違いないと思う。



H29.10.18 講演会 『社会的投資を活用した持続可能な地域社会づくり』

◇はじめに

最初に少し自己紹介をすると、私自身は株式会社PLUS SOCIALという会社の代表取締役とプラスソーシャルインベストメントという会社の代表取締役会長をさせていただいている。ただ、本業は京都にある龍谷大学政策学部の教員である。

私自身のライフワークは寄付や社会的投資をいかに地域に引きつけ、持続可能な地域をどう創っていくかということを考え、取組を進めている。



◇社会的投資、ソーシャルインベストメントとは

社会的投資、ソーシャルインベストメントというのは、社会的収益と経済的収益を併せ持つ投資手法のこと。

投資と言うと、利回りを重要視する、リスクとリターンの関係で投資商品を選ぶわけだが、そこに社会的収益を一つの評価軸として加えるという手法である。

社会的投資を活かした
地域金融→地域自治

○コミュニティ財団 ○ローカルファイナンス ○休銀預金
(社会的投資)

例えば、保育所が地域の中になくて、遠くまでお母さんが送り迎えしている。何かあった時に、お父さんも迎えに行くけど、かなり遠い。

そんな場合、地域のニーズとして、1億円で保育所を建てるプランで、仮に100万円を100人で1億円集めて、地域の保育所を作るとする。

その際、100万円出す人のマインドとしては、別に利回りを増やしたいと思っているのではなく、保育所ができて便利だとか、誰かの幸せがあるとか、そういう期待や享受できる社会的なベネフィットのようなものを、みんなで助け合うことも含めて、求めている。

そのため、「私たちの地域でこんなにおもしろいことができるならお金出します」と言ってくださる人たちも非常に多く、私自身も驚いている。



こういう風にみんなが共感を持ち、何かオーナーシップを発揮しながら地域づくりを考える投資手法のことを社会的投資と呼んでいる。

◇社会的投資と地域金融の融合

私はその中で、地域の持続性とか地域の金融との接続に興味があり、地域の信用金庫や地銀と議論させていただいている。

社会的投資と地域金融がマッチングしたとき、どんなソーシャルイノベーションやローカルイノベーションが起こり、今まで様々なことを諦めていた人たちが何かビジネスを始めるとか、諦めなくても済むとか、チャレンジできるような環境を作り出していくということをポイントとしている。

「国」と「産業」を中心
統治構造

↓
「地域」を単位とする
社会経済ガバナンスへ



もう一つ、地域自治のあり方も変わってくるのではないかと考えていて、税金だけで物事をやるということの限界性を感じることが当然ある。そこで、社会的投資という投資行動を通じて自治や地域経済圏の構築に様々な人たちが参加する、そういうデザインを投資ということを使って描けないだろうかと考えている。

◇社会的投資を実験

自治体のガバナンス改革と社会的投資を組合わせた事業を昨年度、東近江市で行った。

社会的投資型とは例えば、500万円の創業補助の場合、応援したい人から、一口50万の投資を10人募って、その資金をまずは活用しながら、補助金で本来やる事業を展開。予め成果目標を決めておき、成果が出たと第三者が判断したら、行政はお金を初めて執行し、出資者に直接返還をするという仕組み。

自治体のガバナンス改革と社会的投資

○補助金改革としての社会的投資

- 「もらう」という意識 → 成果につながらない
- 「正しく使う」ことにかかる努力 → 当事者性を引き出していない

○成果連動型補助金（2016年試行モデル：プラスソーシャル投資株式会社）

例：創業補助、若者の起業支援

<これまで>

- 500万円を当事者に補助金交付
- 正しく執行することを求める
- 成果は問わない

<社会的投資型>

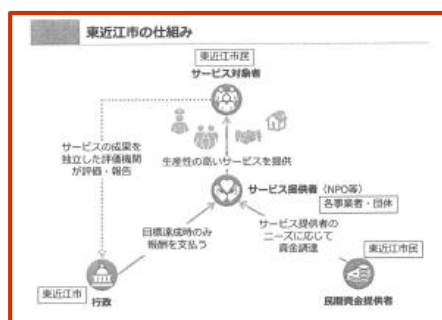
- 応援したい人が50万円×10人 応援衆
- 出資者は当事者化
- 成果がでたら500万円の補助金執行
- 出資者に返金

予め、団体に成果目標を決めさせるということは、行政としても事前にその成果目標をきちんと規定・審査する必要が生まれる。行政側も成果目標をきちんと意識し、これは自治とか私たちの暮らしという局面でも、お金を有効的に使うことができる利点につながる。

東近江市は、最初の事業だったが、それでも89人の地域住民が資金を出してくれた。

当初は市役所の中でも、誰がこんなリスクを背負って資金を出すのかとも言われていたが、すぐに協力していただけた。投資というとリスクがあるのではないかとも思われるが、これはみんなで支え合うモデルであり、それほど高い成果目標を立てるわけでもないで、限りなくリスクは低い。

結論として、全部の事業が成果を達成したので、東近江市からの補助金によって、この市民の皆さん方への出資は償還された。



市役所内部でも、意識変革は進み、全国でも前例がない事業だったので、担当部局以外のへ広がりも大きかった。今年度予算の市長の編成方針の中には、しっかり社会的投資を活かすと書いてあり、今年度は少し事業数が増えて、かつ厚労省のモデル事業も受託することができて、今後も活発に進めていこうとしている。

◇地域住民も地域自治に参加できる

このように地域の自治の仕組み自体も、社会的投資を取込むことによって変革をさせていけるし、何よりも住民が参加する。すると、納税とは違うオーナーシップをそこに汲み上げることができると考えている。

この社会的投資の話は私自身は7年ぐらい前から国の委員会などで言い続けていたが、最初は社会的投資に資金投資する人はいないと言われ続けた。

何とか社会的投資の地域の中にも活かしたかったので、私はこのPLUS SOCIALという社会的投資を受けるための事業会社を作り、今の取組みを始めたのである。

◇社会的投資で地域の空洞化を抑止



他にもリノベーションで、空き家対策事業も、社会的投資を入れながら取組んでいる。

ある町の都心部にある、昭和40年ごろに建てられた古いアパートを、皆さんと社会的投資で買い取り、リノベーションした。

今はきれいになって、1階にはカフェも入り、とても賑わってきている。建物の上階もきれいになって、ここを例えば若い建築家とか、まだ実績のない建築家に投資し、モデルハウスとしてリノベーションしてもらう場所として提供している。

こういう町中の廃墟になっているところは、大体コインパーキングになっていく。まちの人たちはどんどん穴が開いていって、地域が空洞化してしまうと、よく話している。

そうすると、どんどんまちが歯抜けになっていく。だから、地域の方からも一部お金を出してもらいながら、リノベーションに何か『期待』を寄せていた。

まちの人たちも何とか歯抜けにしたくないと思っていたし、前のオーナーも先祖代々受け継いできた土地だから、地域の人たちともっと交流ができるようなスペースにしたいと思っていた。若い建築家には、いい場所だと思っていた人たちもいて、そういうそれぞれの思いが社会的投資で活かされたのである。

皆さんから社会的投資をいただいて、放っておくと潰れていくような建物をリノベーションして、地域のために役立てることができてきた。

質疑応答

講師の呼び掛けにより、たくさんの質問が飛び出しました。興味深いものをいくつか紹介します。



【質問】

社会的投資に参加いただく住民やサービス事業者に対して、情報提供する、学ぶ場所や機会が非常に重要だと考えている。

こんな街を作っていきたいなど、そうした関心を持つ方に、社会的投資を学ぶ機会を今後どう提供していくか、展望があればお聞きしたい。

【回答】

社会的投資を使ってどういう町にしていくのか、こんな姿を作り出したいけど、この資金はこう使えるという議論は本当に大切。

まちづくりは、情報が非対称だと反対運動が起こるし、理解できない部分、感情的な意見も起こるが、やはり情報を共有する中で、どういう選択をしていくか議論していくことが重要で、そのプロセスを共有する中で、資金の流れみたいなことを考えると、全員が当事者化していく。

まちづくりの情報をシェアしたり構想を考えるワークショップなどは、色々な形式で行われている。まちづくり計画のようなビジョンを作ったり、自分たちの地域の経営計画を作っていく議論は、様々なタイプがあるが、多いのは円卓会議で地域の様々なステークホルダーが集まって議論をしている。

やろうと言ったときには、資金がないと言い訳してしまうが、それがある意味言い訳できず、こんな仕組みがあるから活用して、やってみようという流れにつながっていく。いわば町の中での接続感みたいなもの、色々な局面と糊代を持ちながら、地域住民の思いがつながっていくとおもしろいと思っています。

様々な人たちが情報を得たり、議論することを、役所だけが上から落としてもなかなかうまくいかない。住民参加型のまちづくりみたいな手法とよく似ていて非常に良い手法なので、うまくデザインをしていけばいいなと思っている。



名刺交換会 交流会

名刺交換会では、講師との名刺交換のため、長蛇の列ができました。
その後の交流会も、講演会の意見交換を行う等、盛況となりました。



参加者の声

【H29.10.03 『農業を変えていく人の輪を広げたい～自産自消ができる社会を目指して～』】

- ・講師の視点、切口が新鮮で刺激になった。
- ・農業に対する発想の転換、ビジネスとしての農業についての話が面白い。
- ・休耕地活用の課題など、マイファームの事業内容をもっと具体的に知りたいと思った。
- ・創業者の熱い想い、意思を感じることができ、いい機会であった。
- ・日本全体、農業界全体を考えての活動に敬意を払いたい。

【H29.10.18 『社会的投資を活用した持続可能な地域社会づくり』】

- ・新しい資金調達手法であり、特に高齢者の余裕資金を活かす手法だと感じた。
- ・地域モデルのヒントになった。参考になるので、もっと詳しく話を聞きたい。
- ・社会的投資の重要性を認識することができた。
- ・具現化するために、もっと詳しく研究してみたい。
- ・補助金制度とソーシャルインベストメントの連動、住民と事業者、官の一体化の重要性を感じた。



ご参加ありがとうございました！
次回企画を乞うご期待ください。



T (チーム) ナレッジ1003
谷口、西津、石崎、中川、遠山

T (チーム) ナレッジ1018
谷口、西津、亀崎、家木